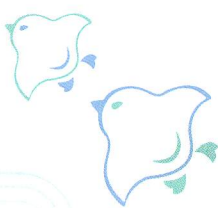


京潮の香り

昨今の京の町の新店事情と比べて見ても、規模と浮かれ具合が羨ましいクアラランプー。



発音上、あえてクアラランプーである。最後の「ル」まで発音するのは多分日本人だけである。京都に住んで「地球屋」か「HUB」にしか吹き溜まることのできない外国人から言われれば、「大きなお世話」と思うが、東南アジアといえども海外で聞くとこんな発音も素直に聞き取れる。

余談はさておき、先月にもお約束した「マレーシア国際フェスティバル」の続報である。2年ぶりに訪れたクアラランプーは、間違いなく速度を持って変わっていた。その浮かれ具合は今の京都の町を見比べても実に羨ましい限りだ。JL721便で現地に着いたのが22時過ぎ、ガイドが案内したいと熱心に薦めるので、口車に乗ったつもりで出向いた所は「トレジャーズホテル」の鳴り物入りのスカイバー。ほとんどの席からライトアップされたベトロナス・ツインタワーの借景が目の当たりにでき、そのカップル度合やグループのたむろ具合を窺っても、ここが今イケているスポットであるということは一目瞭然である。フロア中央にある遊びの泉水空間は実にもったい

ない。BGMや照明からしても週末はダンスホールにでもした方が、集客の効率がいいのにと、つまらない親心を抱きつつ小腹がすいたので、久しぶりのジャン・アローは屋台街で飯を喰った後、今宵は大人しく一人ホテルで旅の疲れを取ることにした。

朝起きると、泊っているプリンスホテルの前が妙に騒がしいことに気づく。聞けば何でもこちらが昨年9月、このプキツ・ピンタンエリアにオープンしたばかりの複合商業施設、「PAVILION」だという。総賃貸面積137平方フィート、1Fから7Fまで優雅な吹き抜けを見せ、世の女性を誘惑するかのようカジユアルブランド店やレストランがフアサードからその顔を覗かせる。その様相はちよつと大阪の「NJJ茶屋町」のようにも見える。スパーマーケットから映画館、フィットネスまでの施設を入れるとおよそ350店舗、その店々が狡猾にもあらゆる角度から生活を提案してくるのだから困ったものだ。

「Jackie Cafe」に出くわす。シンガポール・マレーシア・上海と3カ国で3日連続オープンというから気合の入れようは半端でない。ギャラリイを楽しみに来たゲストにフロアの回廊をそのままカフェ空間として、ビバレッジ&フードを提供、売り上げの2%を彼が主宰する慈善基金に回すのだとか。さすが世界のジャッキーである。

こうなると同じ界限で最大、最高級といった触れ込みで、一足先にオープンしていた「スターヒル・プラザ」の集客が気になってくる。庶民的とはいえ、たださえベトロナス・ツイン・タワー内の「SURA KUCU」の出現で、痛手を喰らっていたのだからここにきてこいつが黙っているはずがない。そうガイドに仕掛けると、慌てるようにコンセプトを変更しこ1年でリニューアルを果たしたところだと苦笑した。ホテル「JWマリオット」と直結していることは、前回の施設の吹き抜けとは同じ吹き抜けでも随分、雰囲気が違う。世界の一流ブランドを取り揃えて店々を配しているといった気概もあるのだろうが、照明やその内装から伝わる荘厳感は一枚上である。中でもB1Fから1Fにかけて属性を選えたレストランやバーを、巧みに混在させるその組み合わせ方は実に小気味いい。ジャズライブも楽しめる1Fの「THE ENZY BAY」や日本人の店舗デザイン活躍目覚ましいB1Fの「Village Bar」などは地元の人々にも人気ようだ。上階のアートギャラリイ、ミューズフロアで偶然にも私の誕生日と同じ日にオープンしたという、ジャッキー・チェンの

①「PAVILION」の1FフロアはオープンエアスタイルのカフェやカーディラーなどがSPなショースペースとして活用するなど、パブリックなピロティ感が心地いい。地元よりも観光や商用で訪れるコスモポリタン向きだろうか。②どこでも乗り降りできるの意を込めたダブルデッキカータイプのバス「Hop-on Hop-off」は、KLタワーやチャイナタウンを含む街中の主要ランドマーク、22箇所をバスストップにして自由に回遊できる、新しい観光客の足である。1日券で160RM。③Jackie Cafeのオープニングポスター。中国本土でも17カ所の学校を建設している彼の慈善基金組織が誇示されていた。④Jackie Cafeの顔であり中枢神経のレセプションカウンター。⑤ベトロナスをホテルの1室から望める光景はもはや珍しくないが、カップルのための特等席として用意されたこのスカイバーの借景は、今や話題騒然なのである。⑥「スターヒル・プラザ」の荘厳な吹き抜けはアダルトかつ不埒な空気が漂う。

ブートレグな雑貨や行列のできる電眼（ロンガン）ジュースの店など活気溢れるチャイナタウンを流し、街中を一日乗車券で周遊できる新しい交通手段「ダブルデッカーバス「Hop-on Hop-off」」を取材しながら、この旅で感じたことは、どこことなく80年代の浮かれた東京を垣間見たそんな気分だろうか。疲れと二日酔いに萎えた体を客室（ハッパ）料理に癒されつつも、京都にもクールな遊び場がそろそろ出来んものかと、ため息をつくクアラランプーでありました。世の女性諸君、今はこのクアラランプーにその身を委ねるがいい…。



モックン・カズロー ● 京都生まれの京都育ち、生家は根城染屋という生粋の京都人。現在は「京都CFI」の2名の取締役を務める傍ら、広告企画制作から同志社大学の見番プロジェクト講師まで、ジャンルの垣根を越えて京都にまつわる仕事に従事する。趣味のつぼりの評判である。「京都CFI」スタッフ無責任、町案内」連載中